

『世界の国鳥』

水野 久美／著 青幻舎（2017年）

国鳥とは、国旗や国歌のように国のシンボル、象徴としている鳥のことです。最初に国鳥を制定したのはアメリカです。日本では、1947年に日本鳥学会によって日本固有種であるキジが国鳥に選ばれました。国鳥の選定方法は、議会で決められたり国民投票で選ばれたり、国により様々です。この本では、36か国の国鳥をカラー写真で紹介しています。色鮮やかな羽を持つ鳥、大きな力強い翼を持ったワシや白鳥。その鳥を国鳥に選んだ国のことを考えながら、美しい写真を眺めることができます。



『鳥に単は似合わない』

阿部 智里／著 文藝春秋（2014年）

この本は、3本の足を持つ鳥「八咫鳥」の一族が支配する山内という世界が舞台となっています。八咫鳥は、人間のような姿と、鳥の姿を使い分けながら生活しています。そんな山内で世継ぎである若宮の妃選びが始まり、大貴族の姫君4人が集められました。ところが、若宮はなかなか姫君たちのもとを訪れません。東家のあせび、南家の浜木綿、西家の真緒の薄、北家の白珠、4人の姫君のうち、誰が若宮に選ばれるのでしょうか。八咫鳥シリーズ、1作目です。



『日本で会えるペンギン全12種パーフェクトBOOK』

木村 悦子／著 グラフィック社（2023年）

世界に18種類いるペンギンのうち、日本では12種類が飼育されています。そんなペンギンたちの特徴が写真付きで紹介されています。また、飼育担当者の面白エピソードも紹介されているので、ぜひ楽しんでください。ちなみに、大阪でもペンギンを見ることができます。海遊館では、キングペンギン・ジェンツーペンギン・アデリーペンギン・ミナミイワトビペンギンを、天王寺動物園では、フンボルトペンギンを見ることができます。可愛いペンギンたちに会いに行ってみてください。



『ダチョウはアホだが役に立つ』

塚本 康浩／著 幻冬舎（2021年）

この本によると、ダチョウはとっても忘れんぼうです。よく道に迷うし、家族の顔もすぐに忘れてしまいます。しかも、気が荒くて著者も何度もケガをしています。ダチョウは世界一大きくて、おそらく世界一忘れんぼうの鳥です。しかし、ダチョウはいろんな病気から人間を守ってくれる力を持っているのです。コロナ禍では、ダチョウパワーを使って作ったあるものが、医療の現場で使われました。そんなすごいダチョウパワーを、この本で探ってみましょう。



『トリトリビア 鳥類学者がこっそり教える野鳥のひみつ』

川上 和人／監修 マツダ ユカ／画
西東社（2018年）

「能ある鷹は爪を隠す」ということわざがあります。実力のある者ほどそれを表面に出さないことの例えです。しかし、実際は頭が良い鷹ほど爪を使って獲物を捕らえます。

街中でゴミ袋を漁り荒らすカラスに、私たちは良い印象は持たないはずですが、実はカラスのおかげでゴミの分解が早まり、資源が効率よく生態系に還元されているのです。この他にもスズメやハトなど身近な鳥たちが紹介されています。図鑑では書かれていない鳥のひみつを知ることができます。



『ペンギン鉄道なくしもの係』

名取 佐和子／著 幻冬舎（2014年）

大和北旅客鉄道、波浜線遺失物保管所（通称なくしもの係）は、油盥線の終着駅、海狭間駅にあります。そこは海の近くで、働いているのは赤い髪のやさしい声をしたイケメンの駅員、守安蒼平となぜかペンギン。なくしもの係のペンギンは、自由にひとりで電車に乗って、ちゃんと海狭間駅に帰ってきます。守安は、なくしものをした人に届いたものを渡すだけでなく、なくしものを通して、前向きに生きる後押しをしてくれます。ペンギンのほほえましい様子にも癒されます。

